

日本語構文の 意味と機能を 探る

*The Semantics and Functions of
Some Grammatical Constructions in Japanese*
Ken-ichi Takami / Susumu Kuno

高見健一・久野暲

くろしお出版



日本語構文の 意味と機能を 探る

*The Semantics and Functions of
Some Grammatical Constructions in Japanese*
Ken-ichi Takami / Susumu Kuno

高見健一・久野暲

[著者紹介]

高見 健一（たかみ・けんいち）

1990年に東京都立大学文学博士号を取得し、静岡大学、東京都立大学を経て、現在、学習院大学文学部教授。主な著作に *Preposition Stranding* (Mouton de Gruyter, 1992)、『機能的構文論による日英語比較』（くろしお出版、1995）、『日英語の機能的構文分析』（鳳書房、2001）などがある。

久野 暲（くの・すすむ）

1964年にハーバード大学言語学科 Ph.D. を取得し、同学科で40年間教鞭をとる。現在、ハーバード大学名誉教授。主な著作に『日本文法研究』（大修館書店、1973）、『談話の文法』（大修館書店、1978）、『新日本文法研究』（大修館書店、1983）、*Functional Syntax* (University of Chicago Press, 1987) などがある。

なお、二人の共著による主な著作に *Grammar and Discourse Principles* (University of Chicago Press, 1993)、『日英語の自動詞構文』（研究社、2002）、*Quantifier Scope*（くろしお出版、2002）、『謎解きの英文法—冠詞と名詞—』（くろしお出版、2004）、*Functional Constraints in Grammar* (John Benjamins, 2004)、『謎解きの英文法一文の意味—』（くろしお出版、2005）、『日本語機能的構文研究』（大修館書店、2006）、『英語の構文とその意味』（開拓社、2007）、『謎解きの英文法—否定—』（くろしお出版、2007）、『謎解きの英文法—単数か複数か—』（くろしお出版、2009）、『謎解きの英文法—省略と倒置—』（くろしお出版、2013）、『謎解きの英文法—時の表現—』（くろしお出版、2013）などがある。

にほんごこうぶん いみ きのう さぐ 日本語構文の意味と機能を探る

発 行 2014年6月10日 初版第1刷発行

著 者 高見健一・久野暲

装 丁 大坪佳正

発行所 株式会社 くろしお出版

〒113-0033 東京都文京区本郷3-21-10

TEL: 03-5684-3389 FAX: 03-5684-4762

URL: <http://www.9640.jp> e-mail: kurosio@9640.jp

印刷所 藤原印刷株式会社

©Ken-ichi Takami, Susumu Kuno 2014 Printed in Japan

ISBN 978-4-87424-628-3 C3081

●乱丁・落丁はおとりかえいたします。本書の無断転載・複製を禁じます。

はしがき

本書は、これまで日本語文法において多くの考察がなされてきたにもかかわらず、まだ問題が残っていたり、解決に至っていない次の5つの構文の「謎」を解こうとしたものである。

(1) 「～てある」構文

- a. 落葉が庭の片隅に集めてある。
- b. *お父さんの肩が叩いてある。 (影山 1996: 186)

(2) 存在文／所有文

- a. 僕には妻子がいる。
- b. 僕には妻子がある。

(3) 数量詞遊離構文

- a. 学生が3人本を買った。
- b. *学生が本を3人買った。 (Kuroda 1983: 154)

(4) 壁塗り交替構文

- a. 壁にペンキを塗る [〈移動物〉が目的語]
- b. ペンキで壁を塗る [〈場所〉が目的語]

(5) 「～させてくれる／させてもらう」構文

- a. 医者の一言が私を安心させてくれた。
- b. *私は医者の一言に安心させてもらった。

私達は本書の以下の5つの章で、それぞれ(1)–(5)の構文を取り上げ、その適格性や解釈の違いについて議論する。ただ、そのような詳しい議論に入る前に、これまで(1)–(5)の構文の何が問題となり、何が未解決で、本書はその「謎」をどのような方向で解決しようとするかを、この「はしがき

き」で簡単に述べておきたい。

[第1章]

(1a, b) (以下に再録)のような「～てある」構文は、「集める、叩く」という他動詞の「ヲ」格目的語(「落葉を集める、お父さんの肩を叩く」)である「落葉、お父さんの肩」が主語になり、「集める、叩く」に「～てある」がついたものである。

(1) 「～てある」構文

- a. 落葉が庭の片隅に集めてある。
- b. *お父さんの肩が叩いてある。 (影山 1996: 186)

この構文は、伝統的な日本語文法研究や日本語教育において、ある動作が終わったあとに生じる「結果」が現在において残っていることを表わす表現であると説明されてきた (Jorden 1963, 高橋 1969, 吉川 1973, 寺村 1984 等)。一方、影山 (1996) や Miyagawa (1989) は、この構文には、「状態変化」ないし「位置変化」を意図的に引き起こす他動詞のみ用いられると主張した。したがって、(1a) では、集められた落葉が庭の片隅に現在あって、その結果が残っているが、(1b) では、お父さんの肩を叩いても、その結果は普通、肩に残らないため、両者の適格性の違いが捉えられるというのが、伝統的な日本語文法研究や日本語教育の主張である。また、上の、(1a) で落葉を集めると、落葉は位置変化をしているが、(1b) でお父さんの肩を叩いても、お父さんの肩は位置変化をせず、普通は目に見えるような状態変化もしないので、両者の適格性の違いが捉えられるというのが、影山や Miyagawa の主張である。

しかし、次の会話を見てみよう。

(6) [生徒達のリサイタルの後で]

先生：子供達みんなに、「よくがんばって偉かった」と褒めてやらなければなりません、褒め忘れた子供はありますか。

助手：太郎君と夏子さんはもう褒めてありますが、花子さんがまだ褒めてありません。

人を褒めても、その人に褒めた結果が目に見える形で残るわけではないし、その褒められた人は、位置変化も状態変化もしない。それにもかかわらず、(6)の「～である」表現は何ら問題のない適格文であり、これまでの研究ではこのような文の適格性が捉えられない。

私達は第1章で、「～である」構文の適格性を捉えるには、「～である」構文が表わす当該事象の行為者と、その観察者を区別しなければならないことを明らかにする。そして、(1a, b)のような例だけでなく、(6)のような例も正しく捉えられる仮説を提出する。さらに、自動詞の「～である」構文と、「美味しいコーヒー豆を買ってあるので、コーヒーを入れます」のような、他動詞の目的語がそのまま「ヲ」格でマークされる「Xを～である」構文も考察し、これら2つの「～である」構文も、(1a, b), (6)のような「Xが～である」構文と一律に説明できることを示す。

[第2章]

(2a, b) (=「僕には妻子が{いる／ある}」)のような文は、「存在文」なのだろうか、「所有文」なのだろうか。言い換えれば、これらの文の「いる」、「ある」は、自動詞(存在動詞)、他動詞(所有動詞)のどちらなのだろうか。この問いに対して、Kuno (1973), 柴谷 (1978) は次のように主張した。

(7) a. 僕には 妻子が いる。[自動詞文／存在文]

主語 be/exist

b. 僕には 妻子が ある。[他動詞文／所有文]

主語 目的語 have

しかし近年、岸本 (2002, 2003, 2005) は、「いる」が用いられた (7a) のような文も、(7b) と同様に他動詞文(所有文)であり、(7a) の「妻子が」が目

的語であると主張している。そして彼は、その主張の根拠として5つの議論 (i) 主語尊敬語化、(ii) 定性の効果、(iii) 「自分」の先行詞、(iv) コントロール PRO の現われる位置、(v) 総称の PRO の現われる位置) を行なっている。私達は本書の第2章で、これら5つの根拠を検討し、そのいずれもが妥当でないことを示す。そして、(7a, b) に示したように、「X ニ (ハ) Y ガイル」パターンの文は自動詞文、「X ニ (ハ) Y ガアル」パターンの文は他動詞文とする Kuno (1973), 柴谷 (1978) の分析が妥当であることを明らかにする。そしてまた、(7b) (=「僕には妻子がある」) の所有を表わす「X ニ (ハ) Y ガアル」パターンの文で、Y が生き物の場合、このパターンが適格となるためには、Y に厳しい制限が課せられていることを示し、どのような制限のもとでこの文パターンが適格となるかを考察する。

[第3章]

生成文法による統語論的アプローチでは、遊離数量詞(数詞)とそれが修飾する名詞句との位置関係に関して、1980年から現在に至るまで、次の2つの事柄が繰り返し述べられ、妥当であると考えられてきた。ひとつは、(3a, b) (以下に再録) に示すように、主語を修飾する数量詞(数詞)は、主語の直後には遊離できるが、目的語の後ろには遊離できないというものである。

(3) a. 学生が3人本を買った。

b. *学生が本を 3人買った。 (Kuroda 1983: 154)

もうひとつは、次に示すように、主語とそれを修飾する遊離数量詞との間に「文副詞」(sentential-*AdvP*-adverb) は介在できるが、「動詞句副詞」(VP-adverb) は介在できないというものである。

(8) a. 学生が今日 2人笑った。 (Miyagawa 1989: 68)

b. *子供がげらげらと 2人笑った。 (ibid.: 44)

私達は本書の第3章で、上記のように主張する Miyagawa (1989), Miyagawa

and Arikawa (2007) の分析を検討し、次のような適格文を提示して、2つの主張がどちらも妥当でないことを明らかにする。

(9) A: 何年生の生徒が酒を何人飲んだのですか。

B: 2年生の生徒が酒を3人飲んだのです。

(10) A: [話し手が、自分の子供の学校のある学年の生徒が始業式の最中にげらげらと笑ったと聞いて、次のように尋ねる]
始業式の最中に、何年生の生徒がげらげらと何人笑ったのですか。

B: 3年生の生徒がげらげらと2人笑ったのです。

疑問数量詞「何人」を伴う(9A)の文パターンは、(3b)の文パターンと同じであるが、この文はまったく適格である。さらに(9B)も同じ文パターンであるが、(9A)の答えとしてまったく適格である。同様に、(10A)、(10B)の文パターンは、(8b)と同じ文パターンであるが、これらも何ら問題のない適格文である。私達は本書の第3章で、数量詞遊離の適格性は、その文の構造や韻律パターンに依存する現象ではなく、文の情報構造や焦点要素、文脈や「概念ユニット」の形成などに依存する意味的、機能的、語用論的現象であることを明らかにする。

[第4章]

日本語の「塗る、貼る／張る、巻く、埋める、飾る、満たす、散らかす、詰める」などの他動詞は、(4a, b) (以下に再録)や次の(11a, b)に示すように、〈場所〉を「ニ」格で、〈移動物〉を「ヲ」格でマークすることも、〈移動物〉を「デ」格で、〈場所〉を「ヲ」格でマークすることもできる。そしてこのような構文交替は、「場所格交替」とか「壁塗り交替」と呼ばれている(奥津 1981、Fukui, Miyagawa and Tenny 1985、岸本 2001、Iwata 2008、川野 2009 等)。

- (4) a. 壁に ペンキを塗る [移動物目的語]
 〈場所〉〈移動物〉
- b. ペンキで 壁を塗る [場所目的語]
 〈移動物〉〈場所〉
- (11) a. 風呂場の床にブルーのタイルを貼って／張って下さい。
 〈場所〉 〈移動物〉 [移動物目的語]
- b. ブルーのタイルで風呂場の床を貼って／張って下さい。
 〈移動物〉 〈場所〉 [場所目的語]

ここで注意したいのは、これまで壁塗り交替が可能と言われてきた上記のような動詞でも、常に2つの構文が適格となるわけではないという点である。この点に関しては、Iwata (2008: 180–184, 192–193, 198) に若干の観察とその分析があるだけで、これまであまり議論されることがなかった。例えば次に示すように、移動物目的語構文は適格でも、場所目的語構文は不適格となる場合がある。

- (12) a. (肩凝りがひどいので) 肩に塗布薬を塗った。 [移動物目的語]
 b. * (肩凝りがひどいので) 塗布薬で肩を塗った。 [場所目的語]
- (13) a. 封筒に切手を貼って投函した。 [移動物目的語]
 b. * 切手で封筒を貼って投函した。 [場所目的語]

どうして (4a, b) や (11a, b) では2つの構文がともに適格なのに、(12a, b), (13a, b) では、移動物目的語構文のみ適格で、場所目的語構文は不適格なのだろうか。私達は本書の第4章でこの「謎」を解きたい。具体的には、「ヲ」格名詞句と「ニ／デ」格名詞句の意味の違いを考察し、この違いから、場所目的語構文は、当該の行為の結果、その〈場所〉の色や形状(形や状態)が大きく変化する場合に適格となる、という制約を提出して、上記例文のような適格性の違いを明らかにする。また、この問題を議論している Iwata (2008) の分析を検討し、その問題点を指摘する。

[第5章]

日本語の「～させてくれる」という表現と「～させてもらう」という表現は、一般に次の(14a, b)から分かるように、言い換えが可能であるが、すでに(5a, b) (以下に再録)で観察したように、「～させてくれる」が適格でも、「～させてもらう」は不適格となる場合がある。

- (14) a. 父は、私にやりたいようにやらせてくれた。
 b. 私は、父にやりたいようにやらせてもらった。
 (5) a. 医者の一言が私を安心させてくれた。
 b. *私は医者の一言に安心させてもらった。

(14a, b) はともに適格なのに、(5a, b) はどうして両者で適格性が異なるのだろうか。

上記の例を見て、「～させてくれる」は、その主語が、「父」のような〈人間〉でも、「医者の一言」のような〈無生物〉でも構わないが、「～させてもらう」は、「二」格名詞句が〈人間〉のみ可能で、〈無生物〉であってはならないと思われるかも知れない。しかし、次のような「～させてもらう」構文が適格であることから、この考えは妥当でないことが分かる。

- (15) a. こんなにカラカラの天気で水不足が続くんだから、もう空に恵みの雨を降らせてもらうしか道はないね。
 b. 今年こそは待望の梅に早く花を咲かせてもらい、春の訪れを早く楽しみたいものだ。

私達は本書の第5章で、「～させてくれる」構文と「～させてもらう」構文の適格性がどのような要因に依存しているかを考察し、機能的分析を提出する。そして、これらの構文の適格性は、単に「適格」か「不適格」かという二項対立的現象ではなく、適格から不適格へと連続体を成す、程度の問題であることを明らかにする。さらに、「～させてくれる／させてもらう」という表現だけでなく、「～させてやる」と「～させてあげる」という表現に

も考察を広げ、その共通点と相違点を明らかにする。

以上、第1章から第5章までの考察を通して、私達は本書で、日本語の構文研究を行なう際に、構文の統語的要因だけでなく、その意味や機能、文脈や我々の語用論的知識など、非統語的要因も考慮することがいかに重要であるかを示したい。そして同時に、読者の方々は、本書を通読されて、これまでの構文研究が、限られた例に基づいて一般化を行なっており、より広範なデータを検討することや非統語的な要因にも配慮することの必要性を認識していただけることと思われる。

最後に、本書の出版を快諾していただき、編集から出版まで迅速に進めていただいたくろしお出版に心から感謝したい。特に、編集を担当していただいた荻原典子さんには、本書の原稿を何度もお読みいただき、貴重な指摘や提案を数多くいただいた。ここに記して感謝したい。

2014年立春 著 者

目 次

はしがき	i
第 1 章 「～てある」構文	1
1. はじめに	1
2. 「状態・位置変化制約」の検討	6
3. 「結果」の検討	9
4. 「X が～てある」構文の意味的・機能的分析	11
4.1 過去の行為に起因する状態の発話時における有意義性	11
4.2 何らかの目的でなされた意図的行為	13
4.3 行為者と観察者が異なるか、同一か？	16
5. 自動詞の「～てある」構文	19
6. 「X を～てある」構文	21
7. 結び	27
第 2 章 「僕には妻子がいる」は存在文か、所有文か？	35
——「いる」と「ある」の意味と構造——	
1. はじめに	35
2. Kuno (1973), 柴谷 (1978) の議論	38
3. 岸本 (2002, 2005) の議論とその検討	42
3.1 主語尊敬語化	43
3.2 定性の効果	46
3.3 「自分」の先行詞	51

3.4	コントロール PRO の現われる位置	56
3.5	総称の PRO の現われる位置	63
4.	所有を表わす「ある」の意味的、機能的制約	68
5.	結び	80

第3章 「数量詞遊離」再考 89

1.	はじめに	89
2.	Miyagawa (1989) と Miyagawa and Arikawa (2007) の分析	92
3.	2つの一般化に対する反例	98
4.	機能的説明	101
4.1	数量詞の位置に課される機能的制約	101
4.2	「機能的制約」が不適格とマークするパターン	102
4.3	「機能的制約」が適格とマークするパターン	103
4.3.1	X が文副詞の場合	104
4.3.2	X が先行文脈に現われていて、旧情報を表わす場合	104
4.3.2.1	X が動詞句副詞の場合	104
4.3.2.2	X が目的語の場合	106
4.3.3	X も NQ_s も焦点情報を表わす場合	109
4.3.4	$\{X, NQ_s\}$ が対比的な概念ユニットを構成する場合	110
4.4	まとめ	113
5.	結び	114

第4章 壁塗り交替構文 121

1.	はじめに	121
2.	「ニ」格名詞句と「ヲ」格名詞句の意味の違い	125
3.	場所目的語構文の適格性	133
3.1	「塗る」	133
3.2	「貼る／張る」	136

3.3 「巻く」	137
3.4 「刺す／挿す(差す)」	139
4. Iwata (2008) の分析とその問題点	140
5. 結び	150
補節：移動物目的語構文と場所目的語構文の関係—派生か基底生成か?—	151

第5章 「～させてくれる／させてもらう」構文等の機能的分析 169

1. はじめに	169
2. 久野(1978)の視点に基づく分析	172
3. 他動詞文と使役文	176
3.1 他動詞を持つ自動詞／持たない自動詞と使役形	176
3.2 自動詞が対応する他動詞を持つ場合	179
3.3 自動詞が対応する他動詞を持たない場合	183
4. 使役形にならない動詞	188
5. 「～させてくれる」構文の機能的分析	189
6. 「～させてもらう」構文の機能的分析	200
6.1 「～させてもらう」構文の基本的機能	200
6.2 利益の表明に関わる2つの要因	203
6.3 利益・恩恵の意味	208
6.4 「～させてもらう」構文の数値分析	211
7. 「～させてくれる」構文の数値分析	225
8. 「～させてやる」構文と「～させてあげる」構文—その共通点—	233
9. 「～させてやる」構文と「～させてあげる」構文—その相違点—	240
9.1 不利益・迷惑を表わせるか?	240
9.2 使役主と被使役主との社会的、人間的関係	247
10. 結び	250

参考文献	263
------	-----

索引	269
----	-----

第 1 章

「～てある」構文*

1. はじめに

動詞に「～てある」という表現を伴う(1a-c)のような文は、すでに伝統的な日本語文法研究で多くの関心を集め、その意味解釈や「～ている」との違いが議論されてきた(松下 1924, 高橋 1969, 吉川 1973, 寺村 1984 等参照)。

- (1) a. 落葉が庭の片隅に集めてある。
- b. 芝生が綺麗に刈ってある。
- c. こちらの皿はもう洗ってある。

(1a-c)では、本来、「落葉を集める、芝生を刈る、皿を洗う」という他動詞表現の目的語である「落葉、芝生、皿」が、「(ガ)や「ハ」でマークされる)主語や主題になり、他動詞の「集める、刈る、洗う」に「～てある」がついている。高橋(1969)は、「～てある」表現が、「対象に変化を生ずる動きが終わった後、その対象を主語にして、結果の状態を述語として表わしたものである」と述べ、吉川(1973)は、この表現が「動作の終わった後の結果の状態を表わす」と述べている。また寺村(1984: 147, 151)は、この表現が「処置の結果の存在」、言い換えれば、「人が何かに対して働きかける動

作、行為の既然の「＝動作がすべて終了した」結果の存在をいう」と述べている（下線はすべて筆者達）。さらに高橋（1969）と寺村（1984）は、「～てある」表現に用いられる動詞は意図的（意志的）な動作を表わす動詞であると述べ、吉川（1973）は、上に示した「～てある」の意味から、「～てある」表現が表わす動作は、何かの「準備のためにした動作だ」という意味が派生してくると述べている（高橋（1969）、寺村（1984）も、「～てある」表現の表わす動作が、何かの準備のためになされたものである場合があることを指摘している）。¹⁾

このような説明は、日本語教育の分野でもなされており、Jorden（1963: 282）は、この表現が「誰か人が行なった行為の結果が残っている」ことを表わすものであると述べ（下線は筆者達。Jorden and Noda（1988: 88-89）も参照）、『みんなの日本語初級Ⅱ教え方の手引き』（スリーエーネットワーク、2001: 54-55）では、『～てあります』（『～てある』）には、人の動作を示す他動詞が使われ、人が何らかの意図や目的を持って行なった行為の結果として物の現在の状態を表わす」と説明され、同時に、この表現では、「準備など、将来のために前もってしておくことが述べられる」と書かれている。

以上の「～てある」構文に関する説明で、ほぼ全員が一致している見解を(2i)のようにまとめて示す。(2ii)は、これらの研究者達の一部で付加的に提唱されている説明である。

（2） 伝統的日本語文法研究・日本語教育での「～てある」構文の説明：

- (i) 「～てある」構文は、ある動作が終わったあとに生じる結果が現在において残っていることを表わす表現である。
- (ii) この構文が指し示す過去の動作は、何かの準備のために前もって行なわれた動作である。

（吉川 1973、『みんなの日本語初級Ⅱ教え方の手引き』2001）

この説明によれば、(1a-c) は、集められた落葉が庭の片隅に現在あり、芝生が現在綺麗に刈られた状態になっており、皿が洗った状態で置いてあるた

め、それぞれの動作がなされたあとの結果が残っているので、適格であると言える。

上記のような伝統的な説明とは別に、近年、Miyagawa (1989) は生成文法の枠組みで、影山 (1996) は語彙意味論の枠組みで、「～てある」表現の適格性に関して新しい提案をしている。彼らは、「～てある」が他動詞と共起する場合、どのような他動詞でも許されるわけではなく、動詞の表わす動作の結果、対象物を変化させたり移動させたりして、対象物の「状態変化」や「位置変化」を意図的に引き起こす他動詞のみ許されると主張している。彼らが提示する次の適格文をまず見てみよう（以下、「～てある」を伴う文を「～てある」構文と呼ぶ）。

- (3) a. 窓が開けてある。
- b. 野菜が炒めてある。
- c. おにぎりが作ってある。
- d. お湯が沸かしてある。
- (4) a. りんごが買ってある。
- b. 現金が金庫に入れてある。
- c. 財布が玄関に置いてあった。
- d. 花が霊前に供えてある。

(3a-d) では、動詞の表わす動作の結果、対象物（主語指示物）が状態変化を受けている。例えば(3a, b)では、窓が開けられた結果、窓は閉まっていた状態から開いた状態に変化し、野菜が炒められた結果、野菜は炒められていない状態から炒められた状態へと変化している。(3c, d)でも同様である。一方(4a-d)では、動詞の表わす動作の結果、対象物（主語指示物）が位置変化を受けている。例えば(4a, b)では、りんごが買われた結果、りんごは例えば、それが売られていた店から、買った人の家へと移動し、位置変化を受けており、現金が金庫に入れられた結果、現金は、それ以前にあった場所から金庫へと位置変化を受けている。(4c, d)でも同様である。